

『イバラ姫』（KHM50）に見られる文化的変位について

梅 内 幸 信

1. グリム童話とペロー童話

グリム童話『イバラ姫』（KHM50）は、マリー・ハッセンプフルークによって語られ、これをヤーコブ・グリムが書き取ったものである。ところが、その後、弟のヴィルヘルムが、これを第2版以降かなり大幅に書き変えている。¹ このヴィルヘルムは、グリム家の近くにあった薬局のヴィルト家の娘たちの一人であるドルトヒエンと結婚する。ヴィルト家の人々は、中産階級に属する教養人であって、グリム兄弟に少なからぬ童話を提供している。² 加えて、グリム兄弟の妹ロッテは、ハッセンプフルーク家の兄弟と結婚しているが、マリー・ハッセンプフルークとは、他ならぬこのハッセンプフルーク家の姉妹であった。グリム兄弟は、童話集の取材源を明確にせず、彼らの童話を農民出身のおばあさんから聞き取り、しかも、ドイツ各地から収集したかのような印象を、読者に与えようとしたと思われる。しかしながら実際には、童話集の中の重要な話は、自分たちの身内の者から収集していたのである。³ そして、その際注目すべき事実は、『イバラ姫』の提供者であるマリー・ハッセンプフルークが、フランスからドイツに移民して来たユグノーの子孫であって、家庭ではフランス語を話していたと言われる点である。⁴

従って、グリム兄弟の『イバラ姫』は、シャルル・ペロー（Charles Perrault, 1628-1703）が1697年にフランスのクロード・バルバン書店から出版した『過ぎし昔の物語ならびに教訓』にその源をもっていると言って差し支えないであろう。⁵ ただし、ここに収められているペローの『眠れる森の

¹ Vgl. Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. Bd.3, Philipp Reclam Jun., Stuttgart 1980, S.463-464.

² 鈴木晶『グリム童話』講談社（現代新書）、1991年、118-119ページ参照。

³ 同書、119-120ページ参照。

⁴ 同書、118ページ参照。

⁵ 『ペロー童話集』新倉朗子訳、岩波書店、1982年、264-268ページ。

美女』は、さらにその70年前にイタリアで出版されたジャンバティスタ・バジレ (Giambattista Basile, 1573-1632) の『ペンタメロン』(Pentamerone, 1634-36) に収められている『日と月とターリア』という童話に基づいていると考えられる。⁶ 文献学者でもあったグリム兄弟は、『イバラ姫』の物語を決定するに当たっては、ペローとバジレの童話を二つとも参考にしたと推定される。

ところが、これら三種の類話においては、物語の筋の構成要素に関してかなりの異同が見いだされる。これら三種の類話の中で最も古い『日と月とターリア』が収められている『ペンタメロン』は、バジレが、枠物語としてすでに名高いジョヴァンニ・ボッカチョ (Giovanni Boccaccio, 1313-1375) の『デカメロン』(Decamerone, 1348-53, 1470年印刷) に対抗して書いたものであった。『デカメロン』に収められている100の物語の大部分は、「それが実際にあった事件だという印象を読者に与える」⁷ という特徴をもっている。これに反し、『ペンタメロン』に収められている50の物語の大部分は、逆に、「実際にあった事件だという印象を読者に与えない」物語に属している。⁸ この関連において、『日と月とターリア』の延長線上にあるペローの『眠れる森の美女』は、バジレの『ペンタメロン』に収められている『日と月とターリア』⁹ の類話と言ってよい。

さて、『イバラ姫』と『眠れる森の美女』・『日と月とターリア』との最大の相違点は、『イバラ姫』にバジレとペローの物語における後半部が、完全に抜け落ちていているという事実である。¹⁰ バジレとペロー、グリム兄弟の童話を比較検討してみると、グリム兄弟の上記のような童話の改変は、彼らの童話集の初版第1巻における次のような主張、つまり収集に当たって自分た

⁶ 野口芳子『グリムのメルヒェン—その夢と現実—』勁草書房、1994年、51ページ参照。／ブルーノ・ベッテルハイム『昔話の魔力』波多野完治・乾侑美子訳、評論社、1987年、298ページ参照。

⁷ Jolles, André: Einfache Formen. Legende, Sage, Mythe, Rätsel, Spruch, Kasus, Memorabile, Märchen, Witz. Max Niemeyer Verlag, Tübingen 1972, S.228.

⁸ Vgl. Lüthi, Max: Märchen. J.B.Metzlersche Verlagsbuchhandlung, Stuttgart 1974, S.48-49.

⁹ ジャンバティスタ・バジレ『ペンタメローネ [五日物語]』杉山洋子・三宅忠明訳、大修館書店、1995年、421ページ。

¹⁰ 野口芳子、上掲書、55-59ページ参照。なお、『イバラ姫』のテキストの異同については、『素顔の白雪姫—グリム童話の成り立ちをさぐる—』(小澤俊夫著、光村図書、1985年、134-175ページ)参照。

ちはなにも新たにつけ加えず、変更もしなかったという次のような主張と大いに矛盾するように思われる。

「私たちはこれらのメルヒェンをできるかぎり純粋な形でとらえようと努めた。〔……〕いかなる細目も、なにひとつつけ加えられたり、あるいは潤色されたり変更されたりしていないのは、それだけでもうこれだけ豊かな話を、アナロジーや連想でふくらませる気がしなかったからだ。これらの話はこしらえることができない。」¹¹

童話集出版に際するグリム兄弟の主張が、出版された童話集そのものの示す事実と大きく食い違っている点を、J. M. エリスはその著書『一つよけいなおとぎ話』の中で詳細に分析している。¹² この問題に関しては、さらに詳細な検討と考察が必要とされると思われる。

2. カニバリズムの問題

グリム童話『イバラ姫』とペロー童話『眠れる森の美女』・『日と月とターリア』との最大の相違点を明確にするために、まずこれら三種の童話の比較表を提示する。

『イバラ姫』に関する三種の童話の比較

項目 \ 童話	『イバラ姫』 (KHM50)A	『眠れる森の美女』 (ペロー童話) B	『日と月とターリア』(ペ ンタメロー ネ) C	備考
1. 主人公	イバラ姫	王女(眠れる森の美女)	ターリア	

¹¹ ジョン・M・エリス『一つよけいなおとぎ話』池田香代子・薩摩竜郎訳、新曜社、1993年、32-33ページ。

¹² 同書、参照。それによれば、彼の主要な批判は、次の5点に集約されると考えられる。1. 『グリム童話集』に童話を提供した女性たちは、グリム兄弟の主張するような農民階級の出身ではなく、中産階級出身の教養人であった。2. 童話を提供した女性たちは、農家のおばあさんではなく、若い女性たちであった。3. グリム兄弟は、その童話をドイツ各地を訪ねて自ら収集したのではなく、主として身内の者や親しい友人・知人から聞き取った。4. 童話の提供者であった女性たちの多くは、フランスのユグノーの血を引いていたので、純粋にドイツ的な童話を収集したとは言えない。5. グリム兄弟の思い描くピーターマイヤー的な家庭のイメージにふさわしくないもの、つまり、家庭内暴力や殺人、近親姦姦、性的描写等を意図的に削除した。

2. 父親の身分	王	王	王	Cで王は、後にターリアと結婚するものの、いわゆる「強姦」が問題となっている。
3. 母親の有無	○(妃)	○(妃)	登場せず	
4. パートナー	王子	王子	王	
5. 賢女ないし魔女	13人の賢女	8人の仙女	-	
6. 眠りの原因	13番目の賢女の呪い	8番目の老いた仙女の呪い	亜麻に混ざったなにかのトゲに指を刺され	
7. 眠りの長さ	100年	100年	数年	目覚めても15歳程度の女性
8. 眠りに陥る年齢	満15歳	15～16年後	言及なし	
9. 眠りに陥るもの	城のものすべて	王と妃を除くすべて	主人公のみ	
10. 目覚めの契機	王子の接吻	魔法が解けて自然に	子どもがお乳を吸おうとして、主人公の指に刺さっていたトゲが抜ける	
11. 主人公の子ども	-	オーロラ姫とジュール王子	男女の双子(ソーレとルーナ)	
12. 人喰い	-	義母は、4歳のオーロラ姫と3歳のジュール王子を食べようとする。続いて主人公を食べようとする。料理長は、雌鹿を食べさせて、妃を騙す。	妃は、主人公の子どもたちを料理し、王に食べさせるよう、料理人に命じる。料理人は、山羊を殺して、料理する。妃は、大臣に命じて、主人公をも、焚き火の中へ放り込ませようとする。	Bにおいて、王は、莫大な財産目当てに結婚していた。主人公は、今や20歳を超えている。

13. 義母の結末	-	王（主人公の夫）の命令で、ひき蛙、まむし、大蛇、小蛇でいっぱいの大桶に入れられ、死ぬ。	妃とその手先の大臣は、王の命で、焚火の中へ放り込まれて殺される。	
-----------	---	---	----------------------------------	--

この比較表からも明確に分かるように、グリム兄弟は、『イバラ姫』を編集するに当たって、ラテン系の童話に含まれているカニバリズムのモチーフを完全に削除し、この童話をハッピーエンドに終わらせている。グリム兄弟は、『イバラ姫』の物語において、カニバリズムのモチーフは、「子どもと家庭のための童話」にはふさわしくないと判断したと推測される。実際、グリム兄弟は、収集した類話を編集する際に、かなりの数の童話をハッピーエンドで終了させている。彼らは、子どもに理想を提示するために、また子どもに希望を与えるために、ある程度意図的に物語をハッピーエンドで終了させたのであろう。彼らの意図は、物語の理想化に理解を示す読者であれば、難なく受け入れられるものであると思われる。もちろん、カニバリズムのモチーフを扱う独立したグリム童話があることも知られている。例えば、『白雪姫』において白雪姫を殺してその肺臓と肝臓を喰おうとする継母、『びやくしんの木』（KHM47）における継母が息子を料理して出したものを、知らずに食べる父親、『ヘンゼルとグレーテル』（KHM15）においてヘンゼルを太らせてから喰おうとする魔女などである。

『魔女なぜ人を喰うか』という書物を著した大和岩雄氏は、この中で「人喰い」の理由として、次の3点を挙げている。

「カニバリズムの動機については、

1. 食通的食人（人肉がうまいから喰う）。
2. 儀礼的・呪術的食人（死者の霊力や性格などを吸収したり、死者と一体化したりするため、死んだ近親や生贄、敵の首長や勇者を殺して喰う）。

3. 生き残るための食人（食料不足などの危機的状況のもとで、通常は禁じられている人肉を喰う）。¹³

牛肉や豚肉、鳥肉、魚肉などが美味しいからという理由から食べるその延長上で、人肉をも喰うというのであれば、これは人間としての倫理観に欠如した「非人間的行為」と非難されることを免れないであろう。¹⁴ 他方、例えば、実際にあった事例であるが、飛行機がヒマラヤ山脈に墜落し、餓死寸前の極限状態の下で、生き延びるために、やむを得ず墜落事故で死んだ人々の肉を喰う場合もある。これは、通常禁じられている行為ではあるが、極限状態においては仕方がない場合であろう。問題は、大和氏の指摘する第2の「儀礼的・呪術的食人」である。

『白雪姫』において継母が白雪姫を狩人に殺させて、その肺臓と肝臓を塩茹でにして喰うのは、白雪姫の美しさを自分のものにするためである。未開人の場合には、自分たちの英雄が死んだときには、その肉を喰うことによって、その勇気を身に付けると言われる。¹⁵ この種の儀式は、キリスト教の儀式においても見られる。つまり、その聖餐において聖餅はキリストの肉であり、赤ワインはキリストの血である。この儀式は、信者がキリストと共にあることの証であると同時に、キリストの精神を常にわが身をもって想起させる手段でもある。

『眠りの森の美女』における王太后が、4歳のオーロラ姫と3歳のジュー

¹³ 大和岩雄『魔女はなぜ人を喰うか』大和書房、1999年、10ページ。

¹⁴ ただし、私たちの食生活において馴染みのある「バーベキュー」という語の、次のような語源を確認するとき、道徳感覚の麻痺しかねない現代においては、家畜の肉と人肉を同列においてしまう、動物的にして鈍感な人間も現れかねないと思われる。<バーバラ・ウォーカーは『「バーベキュー」というのは、本来は、人肉を食べる饗宴であった。barbecueの語源はbarbrotで、カリブ・インディアンが人肉を焼くために用いた葉のついた枝で作った焼き網のことであり」と書くが（『神話・伝承事典』）、カニバリズムの「カニバル」は、前述したように「人肉を食べる饗宴」（バーベキュー）をおこなう「カリブ」の人たちのことである。フィジー人の饗宴も同じだが、それは2の儀礼的・呪術的食人である。>（同書、20ページ。）

¹⁵ 大和岩雄、上掲書、25ページ。大和氏は、ここでアステカ族が「ウィツロポチトリ神の体を食べるために殺す儀式」を紹介し、<この神を喰う儀式で、男のみが「神を喰う」のは、強い戦士になるためだが、こうした行為を、フレイザーは「肉食の共感呪術」といっている>と述べている。

ル王子を料理させて喰うという行為は、場合によっては「若さを取り戻す」方法とも考えられるかも知れない。これは、ある意味においては「儀礼的・呪術的食人」の一種と見なされる可能性を含んでいる。この後、王太后は、主人公である王妃その人をも料理させて喰おうとする。ここで、この王太后に関する料理長の「若い王妃は、眠っていた間の百年を数えないにしても、二十歳を超えていましたから、その肌は白くて美しいのですが、すこし固くなっていたのです」というコメントは、¹⁶ 明らかに「物語の筋の亀裂」を示している。ここに、王太后が「人を喰う」主たる理由が、「儀礼的・呪術的食人」でなかったという根拠が隠されている。その解明に当たっては、そのカニバリズムが、肉そのものを喰うというよりは、喰うという行為によって、精神的飢餓状態を充足しようとしている側面を看過してはならない。それは、ちょうど過食症に罹っている人が、その精神的飢餓状態を充足させるために、とりあえず胃袋を満腹にしてしまう行為と似ている。『眠れる森の美女』における人喰い族出身の王太后の場合、その人喰い行為は、「息子を過保護に育て、息子を自分から奪う者を、すべて抹殺しようとする悪しきグレート・マザー」の残虐行為である。本来、母親は、自分の息子を愛し保護するばかりではなく、厳しく育てなければならない。一方的に息子に愛を注ぐだけの過保護の母親は、その育った家庭における両親との関係において問題を抱えていたと推定せざるをえない。物語の中で王太后は「人食いの種族で」とされ、父王は「そのばく大な財産が目当てだった」¹⁷と説明されている。従って、王太后の父親と母親は、金銭欲に捕われ、自分の娘に愛情を注がなかったと考えられる。このような両親のもとで育てられた娘は、愛情の飢餓状態にあったに違いない。それゆえにこそ王太后は、自分に息子が生まれたとき、この息子を溺愛し、独占しようとするあまり、王妃とその子どもたちを亡き者にしようとしたのである。

¹⁶ 『完訳 ベロウ童話集』上掲書、169-170 ページ。

¹⁷ 同書、167 ページ。

3. 佐川事件

「人を喰った」ふざけた話ではなく、実際に人の肉を喰った事件を、ある日本人男性がパリで起こした。1981年に、佐川一政という小柄な日本人留学生が、ルネ・ハルテヴェルトという美しいオランダ人女子学生を背後から射殺し、その肉を喰ったのである。「フランスの裁判官は犯罪の異常さに困惑し、最終的には佐川を精神異常者と断じ、精神施設への収容を宣告した」¹⁸のであった。しかしながら、1985年5月に、結局佐川は、釈放されて、日本への帰国を許可される。¹⁹

この佐川事件も、ある意味においては、『眠れる森の美女』における「人喰い人種」に属した王太后の場合と同じように解釈される可能性を含んでいるのである。つまり、佐川は、金銭欲ないしこれに相当する欲望に捕われた両親のもとで育てられ、愛情を注がれなかったゆえに、愛情の飢餓状態にあり、この精神的飢餓状態を「人喰い」でもって充足しようと欲したのである。北朝鮮では、飢餓状態の中であって、人肉を喰うことも珍しくないという。²⁰ 佐川のカニバリズムへのイメージは、コリン・ウィルソンの主張によれば、虚弱児として生まれた佐川が3歳のころ、叔父と遊んだ「巨人が騎士を襲撃して喰う」ゲームによって「刷り込み」が行なわれたという。²¹ 佐川の「人喰い願望」は、当初男の子に向けられていたが、あるときを境に、今度は次

¹⁸ コリン・ウィルソン／天野哲夫／佐川一政『狂気にあらず？！「パリ人肉事件」佐川一政の精神鑑定』第三書館、1995年、5ページ。

¹⁹ 同書、23-24ページ。そのフランス側の理由は、「佐川の性的妄想は根が深く完治するとは考えられない。したがって、本人を国内の精神施設に生涯止めおいてその費用をフランスの納税者に負担させることは、まったく無意味である」というものである。

²⁰ 池田智子『カニバリズムの系譜』株式会社メタ・ブレン、2005年、7-23ページ参照。

²¹ コリン・ウィルソン／天野哲夫／佐川一政、上掲書、6-7ページ。<佐川について重要な事実は、生まれた時にすでに甚だ小さかったこと一父親が片手に乗せることができるほどである。その数ヶ月前、母親はデパートで階段を踏み外し、おおかた流産するところだった。大量に出血するが、同時に肉片のようなものも若干流出した。それから46年が経過した今日でも、佐川はいかにも小柄だ。手は子供の手と見まがうほどである。／これが他人の肉を喰うことに焦がれる無意識のベースを形成したと私は考える。／しかし、この欲求は彼が3歳の時に起きた一つのエピソードを除いては概ね自覚されないままに過ぎたものと思われる。こんなエピソードだ。元日に家に来た叔父佐川満男とその友人は子供相手に「巨人と騎士」のゲームを始めた。叔父満男が人間の肉を喰う巨人の役で、一政と弟に襲いかかる。一方、満男の友人は子供をこの襲撃から守る勇敢な騎士の役。しかし、巨人は騎士を殺し、兄弟を自分の料理鍋へ連れ去る……。>

のように、女の子へと向けられてゆくのである。

くそれが、四年生ぐらいの時だったか……担当の男の先生が、科学の時間に伝染病の話をして、「もし××ちゃんが病気にかかって、人喰い人種にとつつかまって、××ちゃんのお尻の肉を喰べたとする。するとかわいそうに、人喰い人種も伝染病にかかってしまうのです」と言って、皆を大いに笑わせました。その時、彼女の、丸い白いお尻が一杯に浮かんできました。××ちゃんは真赤になって、しばらく口をとがらせて怒っていました。彼女は、バーのママさんとかの子で、色が白く、目のパッチリした、かわいらしい女の子でした。

それ以来、その対象は女の子に、そのお尻にかわったのです。>²²

これ以降、佐川の女性に対する「人喰い願望」は、文学という虚構世界において、ちょうどワインが蒸留されてブランデーが出来上がるように、濃縮されてゆくのである。彼の弟は、両親の期待通り勉強し、成績も優秀であったが、しかし、佐川自身は、虚弱児であったことと人喰い願望によって、学業も振るわず、孤独な読書世界に閉じこもるようになる。彼のこの読書行為が、彼の人喰い願望を濃縮することとなったのである。その精神的飢餓イメージは、『眠りの森の美女』におけるオーロラ姫、クノッソスの神殿における人身牛頭の怪物ミノタウルス、『ヘンゼルとグレーテル』に登場する魔女などと同様である。²³

佐川の幼年期における「刷り込み」ゲームという理由もあるにせよ、彼の女性への人喰い願望が濃縮されたもう一つの大きな理由は、なんといっても次のような彼のかなり異常な家庭環境に潜んでいる。佐川は、日本に帰国して、精神施設から釈放されてから、ジャーナルの分野で文学活動が続けるが、世間を大いに騒がした「酒鬼薔薇事件」に関して、酒鬼薔薇君へ宛てた手紙

²² 佐川一政『霧の中』話の特集、1983年、106-107ページ。

²³ 同書、108-110ページ。

の中で、思わず自分の幼年時代の秘密、すなわち 1. 祖父母が、その性的奔放性によって家庭崩壊をまねいたこと、2. その影響を被った両親が性的に禁欲的だったこと、3. 両親が、セックスをタブー視したこと、を明かしている。²⁴

性的にルーズな母方の祖父と祖母、これを知って性的な事柄に敏感に過剰防衛する母親は、逆に佐川を性的に抑圧したと推定される。これに相乗効果を与えたのが、厳格な母親によって育てられ、性的な事柄に関して知識をもたない佐川の父親である。この異常な家庭環境の中で、自分のカニバリズムの傾向をますます強めた佐川は、ルネを射殺し、ふくら脛の赤味の肉の「まったりとした味」²⁵ を楽しむ。後年このことを「もう何年も経つのに、あの味が蘇ってくる。まったりとしたトロのようなお肉。正直、僕はそれまで、そしてそれ以降もあんな旨いものを喰べたことはなかった」²⁶ と回想し、性的快楽に浸っている。意識の表層で記憶している佐川の倫理観は、その何倍もの領域をもつ無意識の中から暴力的に浮上してくる性的欲望にいとも容易に吹き飛ばされてしまったのである。意識の世界と無意識の世界が逆転するとき、倒錯の世界が現れるが、しかし、この倒錯の世界は、遠く離れた世界のように見えても、意外と日常世界において現れる可能性もある。

²⁴ 佐川一政『少年A』1997年、ポケットブック社、119-121ページ。<君にここで言うておかなければならないことがある。僕の家庭は、性に対して異常なまでにストイックだった。女性のヌードが載っている週刊誌一冊、家では見ることができなかった。テレビで男女の絡みーいや接吻の場面ですら、それが流れると皆の表情はひどくこわばった。小学校二、三年のころ、古い足踏み式ミシンの下に隠れて、弟と『人体解剖図』の医学書の写真を見ていた。当然女性の性器の説明も図解で載っている。それを母親に見つかった、こっぴどく叱られた記憶がある。17歳のときにスタンダールの『赤と黒』を読もうとしたら、「これは男と女の話だから、おまえには早過ぎる」と父親から読むのを禁じられた。ホラービデオやホラー漫画を自由に読めた君をじつに羨ましく思う。／なぜ両親が、セックスをこれほどタブー視したかにはそれなりの理由があった。まず母方の家系をたどると、母が、母の祖父が個人貿易をして大変リッチな家族の“お嬢様”だったゆえの、精神的な貧しさに突き当たるのだ。神戸の別荘で毎晩白人男性を呼んでのパーティー三昧に浸る祖母。それに怒った祖父は、二号さんをつくる。それに対抗して、祖母も男をつくって子どもを産む。そんな環境にあっては、セックスに対して母が嫌悪感をもったのも当然だといえよう。／一方、父も、祖父が早くに亡くなったために、母親の厳しいしつけの中で育った。母親ゆえに、当然、性に対しては禁欲的にならざるを得ない。[……]／もしかりに、それが小動物を虐待することであったなら、やっぱり君は限りなく孤独だったのだ。僕は小さいころから、犬をたくさん飼っていた。犬たちは、僕の唯一の親友だった。そんな動物の温かさを身に感じていると、動物を殺したいなどという感情は、ふつう起きてこないものだ。現にいまでも、僕は虫一匹殺せない。>

²⁵ 佐川一政/根本敬『パリ人肉事件—無法松の一致』河出書房新社、1998年、90ページ。

²⁶ 佐川一政『霧の中の真実』鹿砦社、2002年、64ページ。

4. ドイツとフランスとの文化的変位

世界的な人気をもつグリム童話は、日本においても早い時期に紹介されている。その伝播の様態に関する詳細は、未だに十分研究されているとは言えない。ただし、最近グリム童話に関する研究が進むにつれ、グリム童話と日本昔話との類似が指摘されつつある。²⁷

『イバラ姫』が、『眠れる森の美女』の後半の物語を構成しているカニバリズムのモチーフを完全に削除している事実を考慮に入れると、グリム兄弟とペローの童話編集に関する思想の違いが明確に看取される。グリム兄弟は、『子どもと家庭のための童話集』を19世紀初頭に出版している。この時代にあつてドイツは、フランス革命後に台頭してきた英雄ナポレオンによって蹂躪され、プロイセンの敗北とともに、伝統的なゲルマン民族の文化が急速に失われつつあつた。語り継がれることがなく、徐々に消えてゆく古い時代からの物語を、ゲルマン民族の伝統的文化に愛着を抱いていたグリム兄弟が収集しようとしたことは、想像に難くない。さらに、戦争の被害を被り悲惨な生活をしいられた人々に対して、加えて貧しさとともに崩壊しかねない家庭の幸福と秩序を守るために、勸善懲悪の精神が支配する童話を収集して、豊かな国家観を育成しようとしたことは、収集された童話の中にも十分に表れている。

グリム童話研究者レレケの指摘を待つまでもなく、グリム兄弟は、その童話に登場する女性を彼らの抱く女性像に合わせて典型化している。²⁸ 例えば、『ホレばあさん』（KHM24）においてホレばあさんのもとで健気に働く金のマ

²⁷ 筆者もこれまで、二組の話の類似を指摘した。一組目はグリム童話『死神の名づけ親』（KHM44）と日本古典落語『死神』、二組目はグリム童話『歌う骨』（KHM28）と日本昔話『喰い骸骨』である。その際、ドイツと日本における類話を相互に比較検討した結果、次のような文化的変位に関する7つの項目が得られた：1. 宗教的要素、2. 人物関係、3. 解決手段、4. 解決方法、5. 登場人物の職業、6. 謝礼・報酬、7. 処罰の方法。ただし、これら7つの文化的変位要因は、その他諸外国の童話と比較・分析される必要がある。とはいえ、その童話の本質的モチーフは、W.グリムの場合のように、特定の象徴学によって突然変異を被らない限り、異国においても不変のまま伝播されると考えられる。それこそが、童話の命であり、意識の中で言語によって形象化された人類の集合的無意識であると言えるのである。

²⁸ Vgl. Rölleke: Die Frau in den Märchen der Brüder Grimm. In: Die Märchen der Brüder Grimm – Quellen und Studien. WVT Wissenschaftlicher Verlag, Trier 2000, S.196-210.

リーや『灰かぶり』(KHM21)において意地悪な継母と義理の姉妹のもとで多くの試練に耐えて家事をこなす灰かぶり、『十二人兄弟』(KHM9)ないし『六羽の白鳥』(KHM49)において兄弟のために多くの困難に打ち勝つ妹などが挙げられる。

グリム兄弟の童話収集と編集に対する情熱は理解されるのではあるが、他方その理想化の傾向は、今日ではある程度の欠点を含んでもいることを指摘せざるをえない。つまり、『イバラ姫』という童話に関しては、確かにカニバリズムのモチーフを削除した方が、物語がハッピーエンドで終わり、子どもたちに大きな夢を与えるであろう。しかし、これは視点を変えると、「現実無視」とか「観念的」といった批判も加えられかねない。また、現実の残酷で醜悪な側面を捨象するといった流儀は、デモーニッシュと見なされかねない。誰しも、ノバーリスの『青い花』や彼の大宇宙まで広がるロマンチックな詩集を読むとき、そこに現実の残酷で醜悪な側面やユダヤ人虐殺などという非人間的な行為を思い浮かべないであろうが、しかし、彼の魔術的観念論による世界は、一旦転倒すれば、佐川一政の体験した倒錯の世界に変貌しかねないのである。つまり、純粋な世界は、常にバランスを失う大きな危険性に曝されているのである。これに反し、ペローの『眠れる森の美女』は、フランス人の現実を直視する「論理的傾向」によるアポロンの性格を表わしていると思われる。

最終的には、ドイツ的=観念的・ディオニュソス的、フランス的=論理的・アポロンのという対立項によって、思考様式という文化的変位に関する新たな項目が得られる。